



自然観察の第一歩は足もとから

高知県自然観察指導員連絡会副会長 前田 卓

『親子で学ぼう みじかな自然』これは本年七月に幡多郡大方町浮津海水浴場近くの磯で開かれた、町教育委員会主催の「自然観察会」のテーマでした。

朝晩見て知っているはずの地域の自然、視点を変えてみると案外まだ気のついていない自然があるはずです。「自然観察の第一歩は自分の足もとから」の言葉通り、学習の場を足もとに決めその学習を親子ですることの意義を考えると、この計画に対して久しぶりに快さを感じたことでした。

またこの会の当日 昨年度受講の指導員による積極的な協力、創刊号の会長の言葉ではありませんが、地域での観察会などの中心的存在としての活躍ぶりには頭が下がりました。

自然の美しさや自然の楽しさなど自然を知ることの喜びを味わい、自然のありがたさや自然の大切さを学んだ、当日参加の親子は少人数ながら必ずや地域の指導員を助けて、自然観察を続けてくれることでしょう。

指導員の皆さんにはそれぞれの専門分野があり、分野によっては多少の得手不得手があると思いますが、こと自然観察となるとなんでも屋さんや物知り博士に……………というのではありませんが、ある程度の広さが欲しいように思います。

自然と人間とのかかわりあい、自然と自然とのかかわりあいなどにおいて、一つの分野や方向からだけでなしにいろいろな分野や方向から見ないと、その解釈を間違えることがあるようです。

また別の視点から見ると人間は文字や声などによって自分の意志や考えを他に伝えることができますが、自然には人間のような手段はありませんから、人間による細かい観察と判断によって表情や変化を読み取り、声なき声のメッセージを聞き取ってやれるようにならなければと思います。

指導員各位には一層の努力を重ね、自然を理解し自然を大切にする情熱をもって、物事を正しく観察し判断する力を養うための相互研修や情報交換、資料提供や観察会等々を通じてより深い研鑽と切磋琢磨により、地域の核となって自然保護の輪をますます広げようではありませんか。

自然観察指導員研修会に初参加して

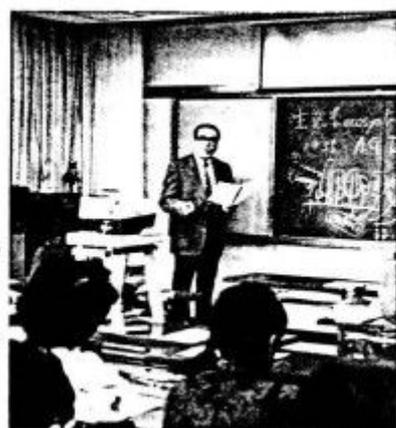
涌井美佐子

私は、現在子供と共に、「親子科学教室」の観察会に参加しています。この観察会は、本会副会長の前田先生や世話人(見虫部門)の別府先生、時には、牧野植物園や野鳥の会の方々の御指導による、広い分野に亙ったぜい沢で楽しいものです。今回の研修会に参加できて、淳良木先生の基調講演を聞き、より以上に問題意識をもって、私達の生活と自然との関わりを見ていく必要を再認識しました。

今や、自然破壊や環境汚染の問題が私達の身近な問題であり、子供達の未来にとっても、最も重要なものと痛感しています。自然に対して、謙虚に人間のおごりを反省し、共存する、否、私達が生かされているのだと気付かされたお話でした。

スライドと並行した講義は、昆虫の生態や変態、自然条件への適応の様子が、沢山見られて、とても解りやすく、興味深いものでした。高知県各地の生物が登場して、身近に有りながら見落としていた、自然の不思議さ、巧妙さに、新鮮な感動を覚えました。分類方法の説明は、カマキリ等、親しみ易い生き物なので、ぜひ、卵鞘の違いを、実際に子供と共に観察してみようと、益々、興味が広がってきました。

私達は、緑豊かな高知に住んで、常に自然に触れていると思っていますが、本当は、目にしている、見えていない残念な状態が多いのでは無いでしょうか。ぜひ、本会の活発な観察会や研修会の機会を沢山持って載いて、自然を愛する会員の方々の心を伝えていってほしいものです。特に、子供達に、自分の体で触れ、見て、「大発見をする感動的な体験を分かち合い、そこから自然を大切にする心が育っていったらと願っています。もっともっと、鳥や化石の話を知りたいと共に、植物の講義が、カットだった事も心残りです。次の機会を楽しみにしています。



澤良木 庄一 会長



川島 宏重 氏(山岳写真家)



「昆虫」 別府 隆守 氏



「野鳥」 中西 和夫 氏



「化石」 三本 健二 氏

タカの渡り調査を終えて

内村満紀

秋、北東の風と共にタカの仲間が日本列島から越冬地の東南アジア方面へと渡って行きます。

高知県もタカ達の渡るコースのひとつになっていますが、ごく一部を除いて詳しいことは殆ど知られていません。この渡りの調査を日本野鳥の会高知支部の協力を得て、何地点かに別れて10月8日に行いました。当日は、大陸からの-30℃という、この秋一番という寒気団の南下により北西の嵐が吹いて、十分な観察は出来ませんでした。

タカ達は、上昇気流を利用して高く上がり、エネルギーの消耗度の低い滑翔で飛行距離を延ばして渡って行きます。私達が担当した虚空山は、標高800mですから平地と比較すると、この日の風は相当強く、気温も低かったため、彼等は高度を上げる事が出来ず、その多くは、観察地点よりずっと低い北山の南斜面を、風にあおられながら非常に早く去って行きました。

現在、渡りが確認されている場所を、点とするなら、点を無線につないで線にする事が出来なかったのは残念です。表1で見られるように、この日確認された個体数は各地点バラバラで、資料としては不十分です。

調査地点以外の場所を通過した可能性については、この日は北西の風が強く吹いた事、過去4年間のデータ(表2)と今年の渡りの様子(表3)、翌10月9日(表4)午後一斉と言って良いくらい飛んでいる事から、ごく少数を除いて、この日の渡りはなかったと考えるのが妥当で、コースを確認するだけのデータはとれなかったと推定されます。

タカの渡りを観察する事は、その姿を楽しむだけでなく、より正確なカウントを長く続ける事により、食物連鎖の頂点にある彼等の変化を通して、私達人間の住む環境の変化をも知る事になります。この調査が継続して行われ、将来彼等の渡って行く道の幾分かでもわかれば素晴らしいと思います。

表1

「サシバの渡り」集計表

観察場所	観測時間	鳥数
波の森	8:00~14:00	81羽
天橋子山	7:40~15:00	191羽
北山〜清池	9:20~14:00	20羽
虚空山	10:00~16:00	104羽

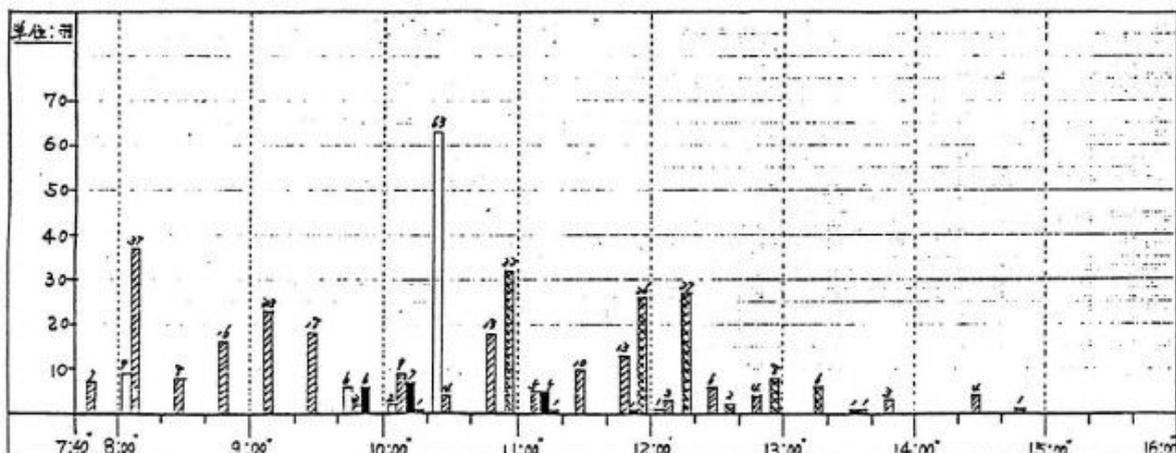
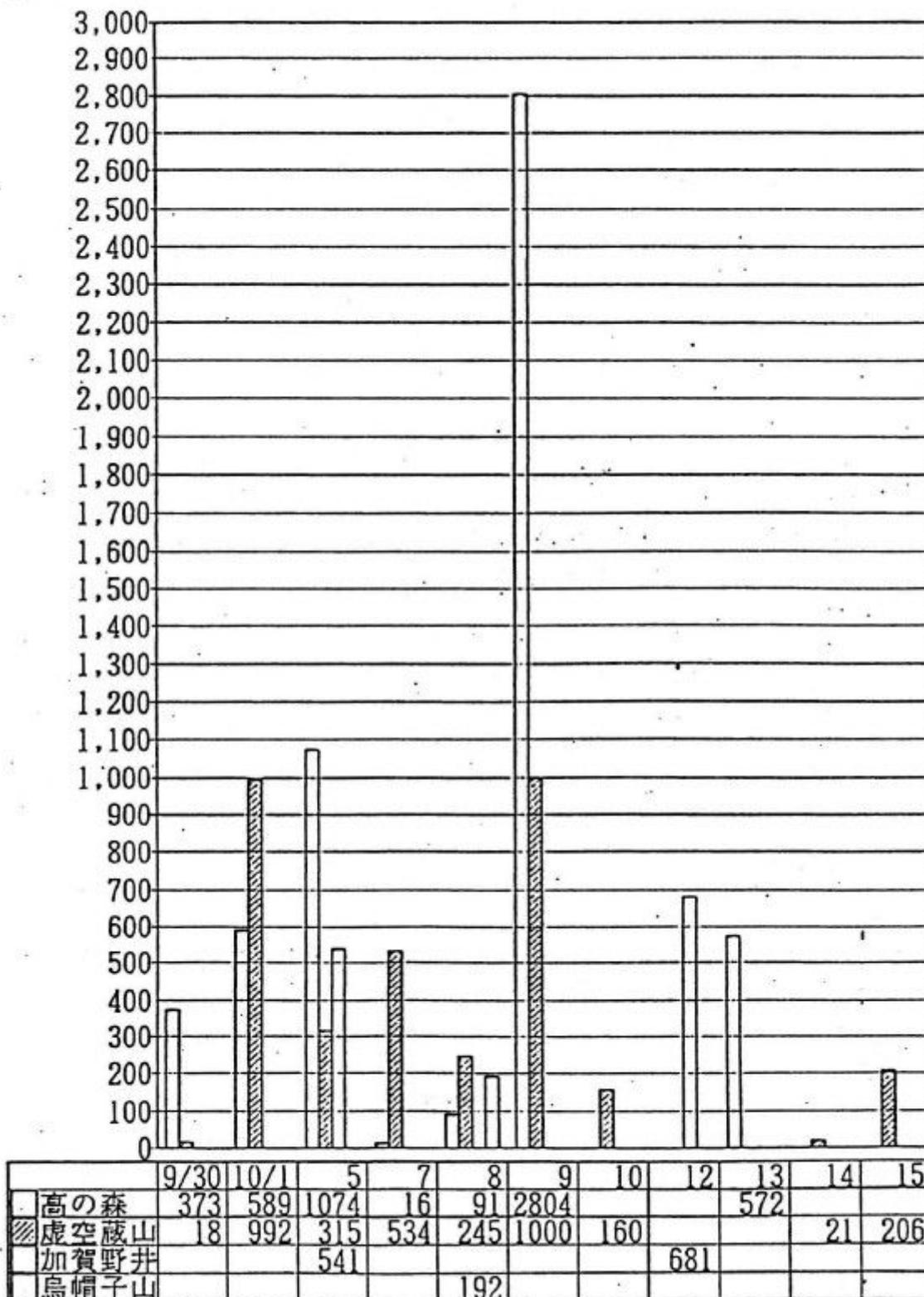


表 3

1989年の「サシバの渡り」集計表

(単位：羽)



(資料；日本野鳥の会高知支部)

表2

1985～1988年の「サシバの渡り」集計表

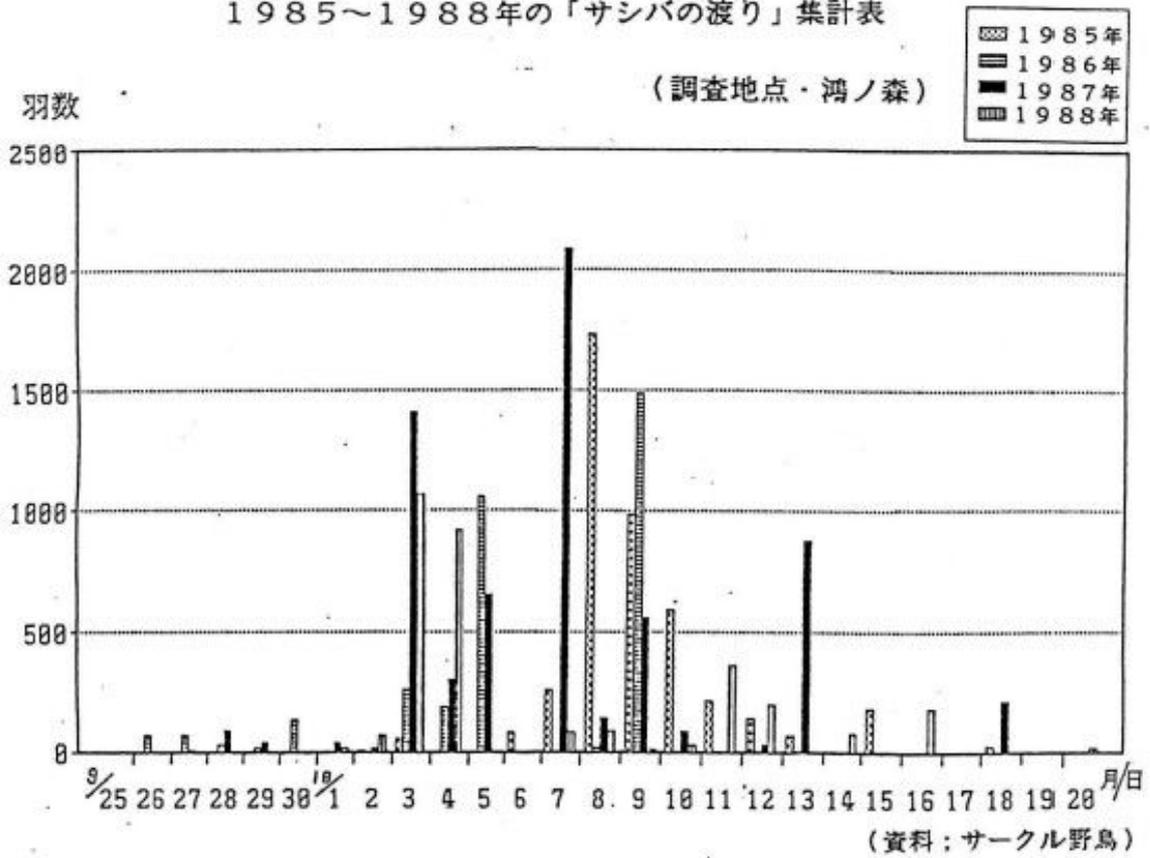
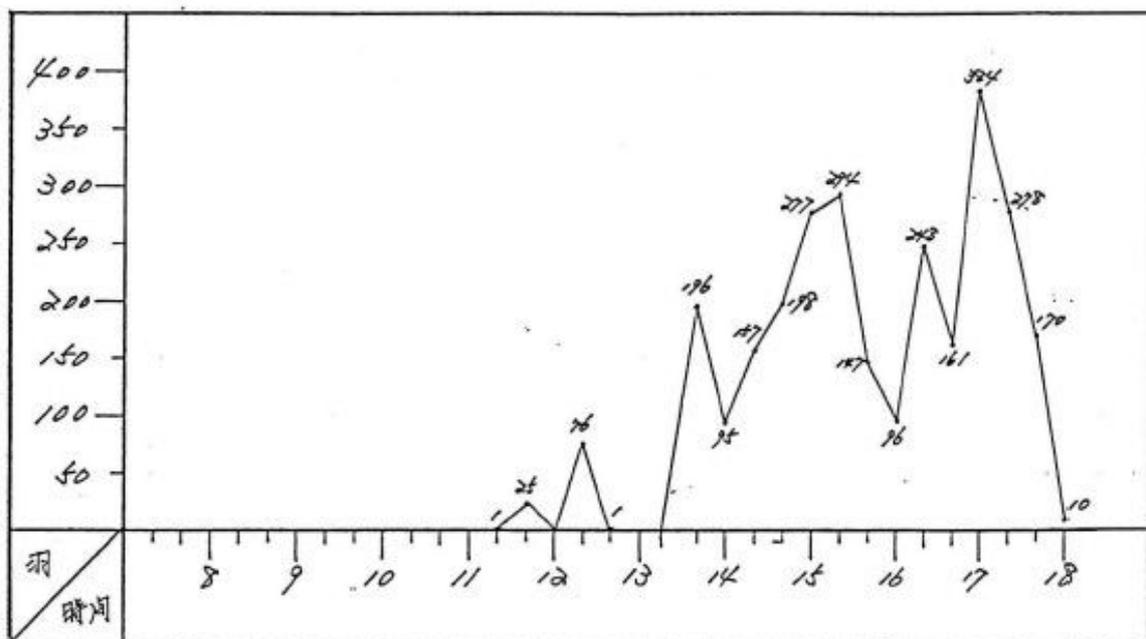


表4

1989年10月9日の「サシバの渡り」集計表





秋の虫の音コンサート

9月24日物部川大橋西側で行った観察会は北風が強くて少し寒かった。この寒さで虫の活動が心配されたが、やがて暗くなって来ると風も弱まり虫達の大きな声が聞こえてきた。

この観察会で注目すべき種が見つかった。タイワンクツワムシである。本種は静岡県以西の海岸線に分布しているが、高知県での記録は初めてだろうと思われる。その後の調査で芸西村の海岸線にも分布することが分かった。県内では海岸線に沿って広く分布しているものとおもわれる。

本種は鳴き声に特徴があり、ギッギィと10回位鳴いた後、ジー又はギーと長く鳴き続ける。又30-50m位はかるく飛ぶ。体型はクツワムシをスマートにした形で、雄雌ともに緑色型と褐色型がいるが物部川では褐色型が80%位が多かった。

物部川大橋西側で記録された直翅目

○印は鳴く虫

バッタの仲間

ヒシバッタ クルマバッタ オンブバッタ
ショウリョウバッタ (飛ぶ時キチキチと音をだす)

キリギリスの仲間

○タイワンクツワムシ
○ササキリ鳴き声 ジリジリジリ
○クサキリ ジーンジーン
○クビキリギス ジーンジーン
○セスジツユムシ チチチチジーチジーチ

コオロギの仲間

○マツムシ チン チンチロリン
○ミツカドコオロギ リッリッリッリッ
○ツヅレサセコオロギ リッリッリッ
○エンマコオロギ コロコロコロリー
○カネタタキ チンチンチン
○クサヒバリ フィリリリリリリ

以上バッタの仲間4種、キリギリスの仲間5種、コオロギの仲間5種、全部で14種の生息が確認できた。年間を通して調査すればもう10種類位はいると思われる。

1989.11. 別府隆守記



【シリーズ見分け方】

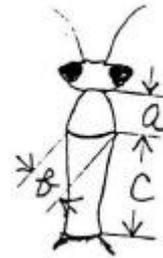
《カマキリの見分け方》

カマキリの分類について

高知昆虫研究会 別府隆守

1) 日本には 10 種類以上のカマキリが生息している。

原色日本昆虫図鑑Ⅲ (北隆館)には約 3 ページにわたって解説されているがそれを図示すれば以下のように簡単になる。



(成虫について 羽の有るもの)

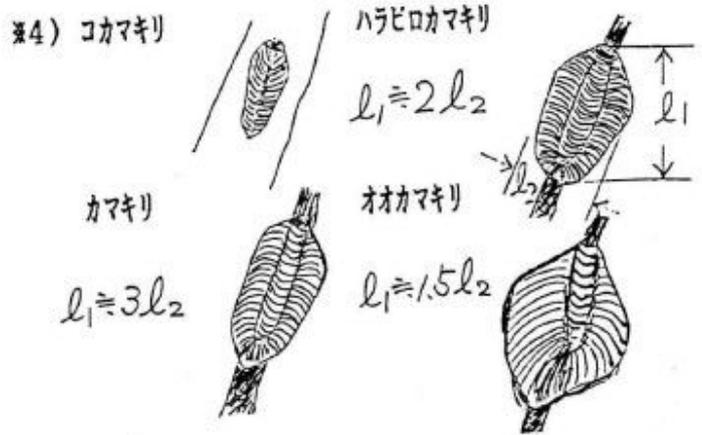
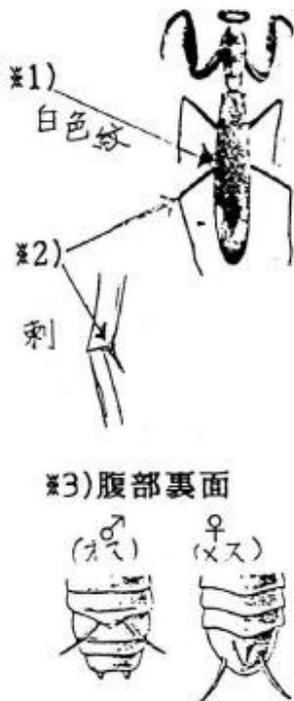
種名	体長 ^{♂×½}	生息地	a/b	c/b
Aオオマキリ	70-95mm	雑木林林辺	1 <	3 ≤
Aカマキリ	70-80mm	雑草地 畑	1 ≠	3 <
Bハラビロカマキリ	50-70mm	雑木林樹上	1 ≠	2 <
Bウスバカマキリ	50-65mm		1 ≤	3 ≤
Bココマキリ	50-65mm	林辺	1 <	4 <
Cヒメカマキリ	30-35mm	山手の灌木上	-	-
Dヒナカマキリ	18-22mm	林中の下草	-	-

以上のように体長で 4 グループに分ける事ができる。体長により、ヒナカマキリ、ヒメカマキリは簡単に同定できる。残りの 2 グループは体長だけでは同定できない。まず B グループでハラビロカマキリは、a/b、c/b の比と前翅中央部に白色紋*1)を有する事で同定できる。ウスバカマキリは後足端の刺欠く*2)事によって同定できる。A グループは、体長だけでは同定しにくい、オオカマキリが全体に大きく、C がカマキリよりも長いことで同定できる。

2) ♂♀の見分け方

♂は♀に比べて触角が長く、体はスマートである。又尾部付属器の違い*3)により同定できる。

3)卵鞘の見分け方 *4)



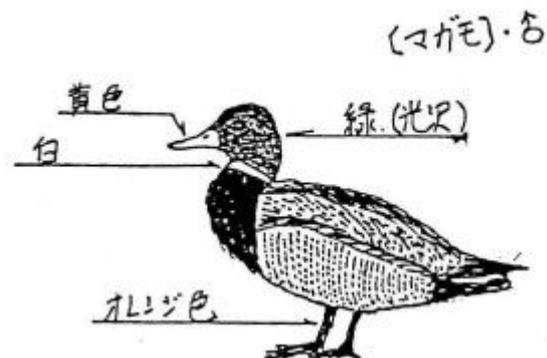
身近なカモの見分け方

〔日本野鳥の会高知支部・西村公志〕

今回は、「野鳥に関しては初心者の方々」向けに秋から冬にかけて高知で身近に見られるカモたちを少し紹介してみたいと思います。

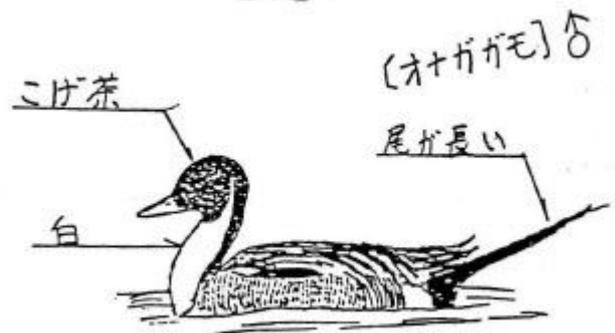
① マガモ

県内では、数も一番多く普通に見られます。雄の頭部は光沢のある緑色でくちばしは黄色、白い首輪をしているように見えます。よく「あいがも」と呼ばれるものはこのマガモによく似ていますが、この白い首輪がないか、もしくはどこかで切れているように見えますので注意して見てみてください。



② オナガガモ

このカモは、県内ではシルエットで見ても混同される種類はありません。カモの間の中でも一番スマートに見えます。雄の尾は細長く伸びていて、雌の尾も他種と比べると長く見えます。



江ノ口川下流の帰化動物(貝とフジツボ)

三本健二(日本貝類学会会員)

江ノ口川の黒く濁った水の中、ヘドロにまみれて生きている貝とフジツボがいる。それを見つけたのは、今年の3月、高知駅前の高知橋のすぐ下流だった。コンクリート壁の、水面より少し上の所にイガイダマシという二枚貝とアメリカフジツボが付着していた。どちらも大西洋原産の帰化動物である。

イガイダマシは、日本への移入が'80年に初めて報告された新顔である。最初にみつかった静岡県清水港のほか、東京湾や福岡県の洞海湾にも知られている。高知市では、'82年に鏡川で発見された。現在潮江橋の橋脚にたくさん着いている。下田川や国分川の下流でもぼつぼつ見られる。

西インド諸島を原産地とし、日本のほか台湾、ホンコン、インド、フィジー、アフリカ東岸にも帰化しているという。船に付着して渡来したものと想像される。

一見、イガイ類に似ているが、系統的には何の関係もなく、イガイ科とは別の亜綱のカワホトトギスガイ科に入れられる。

アメリカフジツボは、日本への帰化は'66年に初めて報告された。'60年代以前に入って来たものらしい。北米大西洋沿岸が原産地で、やはり船に着いてやってきたと想像される。今では日本各地に広がっている。

浦戸湾でもよく繁殖している。鏡川では、山内神社の南でれきの表面にたくさん付着しているのが本種であり、そこより下流ではごく普通に見られる。

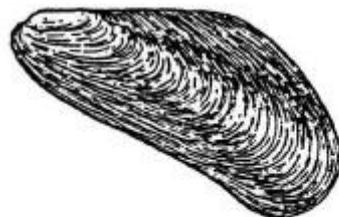
殻の表面が滑らかな白いフジツボなのですぐ分かるが、類似種と区別するためにフタ(蓋板)を観察して、確認する必要がある(下図)。

江ノ口川のもっと下流の丸池橋あたりでは、コウロエンカワヒバリガイという二枚貝も見られる。これも帰化動物である。浦戸湾では全域に分布し、ものすごい繁殖ぶりで、湾内潮間帯の最も主要な貝となっている。

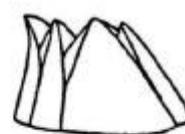
以上3種は、浦戸湾周辺で確認したものだが、ほかの場所ではどうだろうか? 全県的に調査するのもおもしろいと思う。



イガイダマシ
(実物大)



コウロエンカワヒバリガイ
(実物大)



周殻



楯板(フタの一つ)
アメリカフジツボ
(左 1.5倍、右 3倍)

自然観察会活動と自然観察指導員の養成

～自然観察指導員講習会スタッフ養成研修会・連絡会代表者会より～
1989.11.17.～19. 於：こどもの国・自然研修センター

〔代表者会出席者〕

秋田（中村）、宮城（渋谷）、福島（清口）、新潟（根津）、長野（今井・田口）
山梨（植原）、茨城（宮田）、埼玉（太田・遠藤）、神奈川（富岡・武部・星沢・大内）
静岡（高橋・窪田）、愛知（中西・岩崎）、滋賀（村上・阪口）、京都（西川）
三重（前野・橋本）、兵庫（宗田）、鳥取（佐藤）、香川（大石）、宮崎（樋口）
大分（足立）、東京（米沢）
<NACS-J>
金田・柴田・浜口・島山・一寸木・横山・開発・森本

*ディスカッションの中でだされた問題提起とそれに対する意見をまとめました
<スタッフ養成研修会>

●自然保護教育の段階「親しむ-知る-守る」という整理の仕方について

- ・実際の観察会ではこの3段階は分けて考えられない
- ・分けるべきではないのではないか
—— 実際の活動に枠をはめているものではない。活動を広げていくためのマニュアルとして必要だろう。指導員の頭の中では整理しておくことが大切。
- ・「守る」とは具体的にどういうことか
- ・「守る」へのアクセスにはどのような方法があるか
—— フィールドマナー、観察のテーマ、まとめの話の工夫などが入口

●指導員と観察会について

- ・「観察会」を広げるためのマニュアルがほしい
- ・申請書の「指導できる分野に○」は負担が大きい。

●「自然観察」とはということなのか、なぜ「観察会」をするのか

- ・環境教育の名のもとにアウトドア・スポーツ指向の活動がでてきた
- ・自然とのつながりを考えどのように生きていくかを探るのが環境教育の目的のはず
アウトドア・スポーツ派や観光業者とは基本的に違うのではないかと
—— 環境教育のプログラムを研究し実践していく中で、アウトドア・スポーツ指向の人達をひきいれていくことも大切。アウトドア・スポーツ派の活動もよく知り、観察会を常に見直すことも必要。
- ・地方と都会での観察会の違い～今の観察会は都会的で、地方では受入れられない？
—— その地域のニーズにあったテーマの観察会を、それぞれの地域ごとのやり方を工夫、効果をあせりすぎないことも大切。
- ・都会の人が地方にでてきて起こる問題もある
—— 都会の人と地元の人とのギャップをうめる役割を指導員がはたす（御前崎のアカウミガメ保護の例）

<連絡会代表者会>

●連絡会、指導員の交流について

- ・内部の活性化をはかるための工夫をが急務
—— 集まりやすい定例会、仲間向けの研修会・下見、イベントの企画・運営で活動の場作り、個性にあった役割分担、会報の工夫
- ・連絡会のブロック化、地域ごとの指導員の交流が必要ではないか
- ・全国組織の検討を再提案したい
- ・定期的な全国レベルの交流と情報を（活動の肥後ができていない）
- ・全国レベルの会合は（一堂に会するのは）経済的に負担が大きい

●保護問題、保護運動について

- ・連絡会は活動体か連絡組織か
—— 運動母体になるとプラス、マイナス両方ある。別の看板を用意して活動する方法もある。どのような問題であろうと、連絡会での議題にのせて話し合い、正確に認識することがまず大切。「運動に無関心」では困る。
- ・観察会活動をどう生かすか
—— 観察会活動も自然保護運動の一環だということを再認識したい
- ・他の運動体との関わり

●観察会の内容、活動の進め方

- ・観察会のイメージ作りも（ex. 連絡会の愛称、自然観察）大切
- ・アウトドア・スポーツ指向への対応（つっぱねて済むものではない）
- ・地方らしい観察会プログラム（都会の自然観察は静的すぎる）
- ・マスへの対応の必要性は切実

●連絡会とNACS-Jの関係

- ・アフターケア——指導員へのメッセージ、ていねいな情報提供を（指導員集団内部活性のために）
- ・各県の会員へのメッセージ、ダイレクトメール的に機関誌でできないか
- ・協会スタッフによる人的援助をよりこまやかにやってほしい
- ・協会は精神的支えの役割を
- ・役割分担が必要、財政的ベースは持てないのか

●指導員講習会受講者について

- ・フリーパスすぎる
- ・受講前のチェックをしてもいいのではないかと（アンケートによるチェックなど）
- ・よびかけ方の問題がある。連絡会からの推薦制や活動への参加を出席条件にしてはどうか

●「報酬」の問題／「ボランティア」という言葉の問題

事務局からのお知らせ

予定より遅れましたが会報 NO, 2 が出来上がりました。今回は、創刊号の会長に続き巻頭言を前田副会長にお願い致しました。又、11月18日に行ったスライド研修会には、会員以外の方も何人が御参加いただき、会報にも研修会についてお書き頂きました。今後も本会の活動を通じて自然保護の輪が広まっていけばと考えています。

さて、今回から前回お願いしていた会員の自己紹介以外にもシリーズものとして【シリーズ見わけ方】【シリーズ土佐のレッドデータ】を掲載していくことになりました。【シリーズ見わけ方】は、身近にある自然物でも得意な部門以外のものは、なかなか簡単には見分けることが出来ないのではないのでしょうか。そんなとき少しでも役にたつたらと思い初心者を対象とした簡単に出来る見分け方を載せていきたいと思えます。また【シリーズ土佐のレッドデータ】では、ある地域で以前は有り触れていた自然物が現在無くなってしまった、あるいは少なくなったといったことや、逆に以前には、無かったものがみられるようになったなどの情報を載せて今後の自然保護活動に役立てればと考えます。

今回は、鴻上世話人から素晴らしい資料を頂きましたので会報の別冊としてお送りします。この2つのシリーズをふくめまして、会員の普様からの投稿、意見発表をお待ちしています。

編集委員

動物	：野町 泰造	(TEL:0888-25-3356)
昆虫	：別府 隆守	(TEL:0888-33-2972)
植物	：鴻上 泰	(TEL:08875-3-5611)
地質、地形・魚類	：佐々木 久夫	(TEL:0888-43-6979)
化石・貝類	：三本 健二	(TEL:0889-26-3634)
鳥類	：西村 公志	(TEL:0888-75-3440)
自然保護全般	：中村 裕介	(TEL:0888-24-9268)
〃	：箭野 雅美	(TEL:0888-43-9288)

事務局

高知県自然保護課	：橋本 淳	(TEL:0888-23-1111 内 2280)
----------	-------	---------------------------

